

～輝きの子育て～

感受性、個性を育てる

11月23日の夜はサッカーワールドカップで、日本が強豪ドイツを破り歴史的勝利を手にしました。今月号が出される頃には、一次リーグ突破の朗報が入っていることを祈ります。

今回は、感受性、個性の育て方について記します。

作家の高見沢潤子氏が兄である小林秀雄氏から学んだ話を読み、なるほどと感じたので引用します。

感受性を育てるには、どうしたらよいかと兄に聞いた時「終始、怠ることなく、立派な芸術をみることだ。そして感じるということを学ぶんだ。立派な芸術は正しく、豊かに感じることをいつでも教えている。まず、無条件に感動することだ。ゴッホの絵だとかモーツァルトの音楽に理屈なしでね。頭で考えないで、ごく素直に感動するんだ。その芸術から受ける何ともいいようのない解らないものを感じ感動する。そして沈黙する。その沈黙に耐えるには、その作品に強い愛情がなくちゃいけない」と。

感じるには、理解力とか判断力というのではなく心の才能というものが必要なのである。子供のように純粋な謙虚なきもちがなくてはならないのである。いろんな知識を得、経験を重ねるとことう素朴な心を私たちはみんな失ってしまう。

人間は心の底から感心し、感動しなければ良いものは創れないし、よい考えもおこらないと思う。

次いで、個性について、兄はこんなことを言った。

「人間は自分より偉い、優れた人に出会ったら、その人を心から尊敬できるようなナイーブなものを持ってなくちゃ駄目だ。他人への信頼と無私な行動とが一番よく自分の個性を育てるものだ」と。

個性というものは自分に与えられている物だから、自分で育てなければならない。自分の個性と思われるものを、努力して苦勞して自分で磨き上げなければならないと思っていた。しかし、年をとると共にこの言葉が真実であることが分かってきた。個性を育てるのに、私のように誤解して間違った方向をとってしまう。ことに、人を尊敬するとか、他人を信頼し無私になることは自分を殺してしまうと思って、俺が俺という気持ちを持つとすると。そうすれば、ますます個性をそだてることは難しくなるだろう。

兄が言うように「心から尊敬できるナイーブなもの」が大切である。

以上が小林秀雄氏が妹の高見沢潤子氏に与えた助言と高見沢の受け取り方である。

最近、購入した原田マハ著「原田マハの名画観賞術」の本のオビに「理解するのは後でよい。まず心の窓を開けて見る。日本は世界的にみて、美術大国、私たちは、いつでもどこでも素晴らしい作品に出会えます。」と書いてあった。

保護者の方も、お子さんを美術館につれていったり、偉人伝を読み聞かせたりする機会を持ったらどうでしょうか。

片野 英司

参 考

小林秀雄（1902年～1983年）

文芸評論家 作家 美術 古美術収集家、鑑定家

高見沢潤子（1904年～2004年5、12）

作家 随筆家 漫画「のらくろ」の作家 田河水泡の妻

出典 「一日一話読めば心が熱くなる365人の生き方教科書」

11月17日の欄より